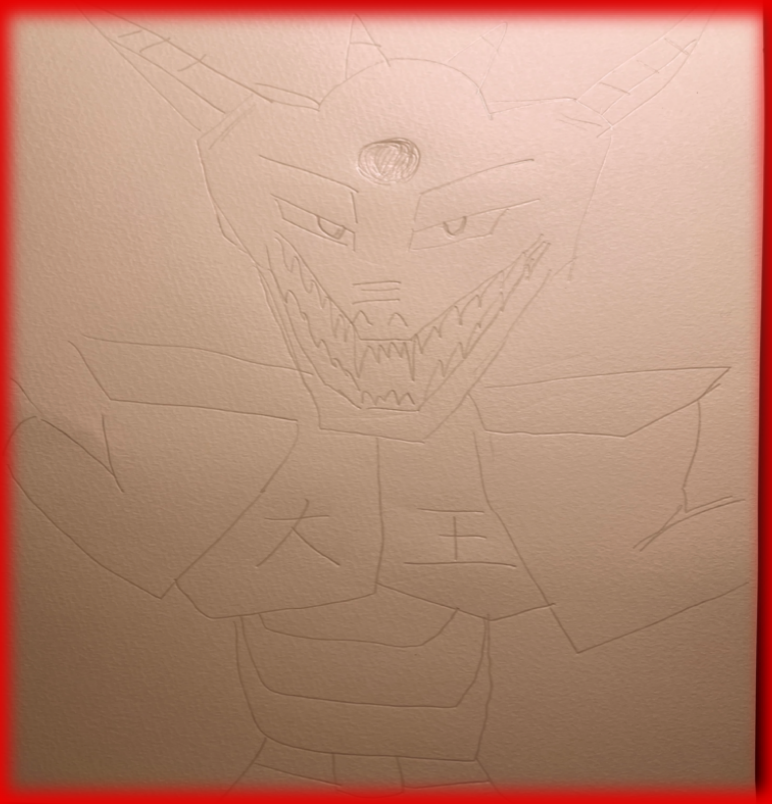
THE KING OF GALAXY

キングオヴ ギャラクシー



夏木康志

目次

０　はじめに 1
１　大王襲来 2
２　最強の強化人間 5
３　グレート・アジア 7
４　キングオヴギャラクシー 9
５　超一流の暗殺者 11
６　ジャック・ハロルド 13
７ジャックの結婚 16
８　アジアの死 18
９　未来からの使者 21
１０　ヘルリベンジャーズ 22
１１　結末 24
あとがき 25

奥付
奥付 29

0　はじめに

この手記は『フジワラ４兄弟の野望』の著者タビト大伴が当時のキングオヴギャラクシーを回想して書いたものだ。この手記はアルセーヌ・ポルゴの息子が知人のマリア・ハロルドと共に旧世紀データベースを漁っていたところ発見された。キングオヴギャラクシーとは旧世紀において行われたタッグ格闘大会を意味しており、その主催者は当時の火星皇帝であった。

マリア・ハロルド

１　大王襲来

人類が宇宙に出て間もない現代、地球連合政府のある北米大陸グレートソルトレーク砂漠に、銀河帝国議会の議長、つまり銀河の大王は単身で現れた。全長２００メートル、まさに怪獣や恐竜という言葉が当てはまる。銀河の大王は二足で直立していたが尻尾が生えており、背中には翼が生えていた。顔はワニ型だ。宇宙への核兵器ポイ捨てに抗議して、銀河の大王は地球圏に現れた。

地球連合政府代表は大王に向い、こう言った。

「私共の連合議会では、全会一致で宇宙空間への核兵器の完全廃棄を約束しました。４機の軌道エレベータも完成した今、地球から核廃絶を行う最大のチャンスなのです。」

「だから言っておるじゃの。核兵器廃絶は結構、それは地球という一惑星の中で処理する問題で、宇宙廃棄など以ての外。環境汚染や、惑星間紛争の理由になる。ワシが直接説得しても応じないのなら、この地球という惑星ごと、銀河のチリになって貰うしかないな。」

「我々は銀河帝国の属国ではありません。あなたのような怪獣はここで絶滅してもらいましょう。」

言い終わると、地球連合軍は銀河の大王に向かって一斉砲撃を行った。

「やむを得んな。地球という惑星、ここで滅ぼす！」

銀河の大王は空中に翼で舞い上がると、両手に気を溜め、強烈なエネルギー波を放った。ギャラクシーウェーブだ。

地球連合軍の部隊は全て蒸発していた。

「次は本気じゃぞ。一気にカタを付ける。食らえー、ギャラクシーウェーブ」

「今の一撃、止めてみせる」

突如、現れたスーツ姿の男は、こう言い放つと、片手で大王のギャラクシーウェーブを受けきった。

「貴様、名を申せ！」

「ゲーセ・ハロルドだ。この地球（ ほし ）を守ってみせる！」

「もう貴様に気は残っとらん！ これで、トドメじゃ。フルパワーギャラクシーウェーブ！！」

強烈な爆発と共に、ハロルドは姿を消していた。地球は、何とか無事だった。

「ハルロドという男、やるな。しかし、ワシの敵ではない。今回はあの男に免じて、地球を滅ぼすことはあきらめてやろう。この次は、ない」

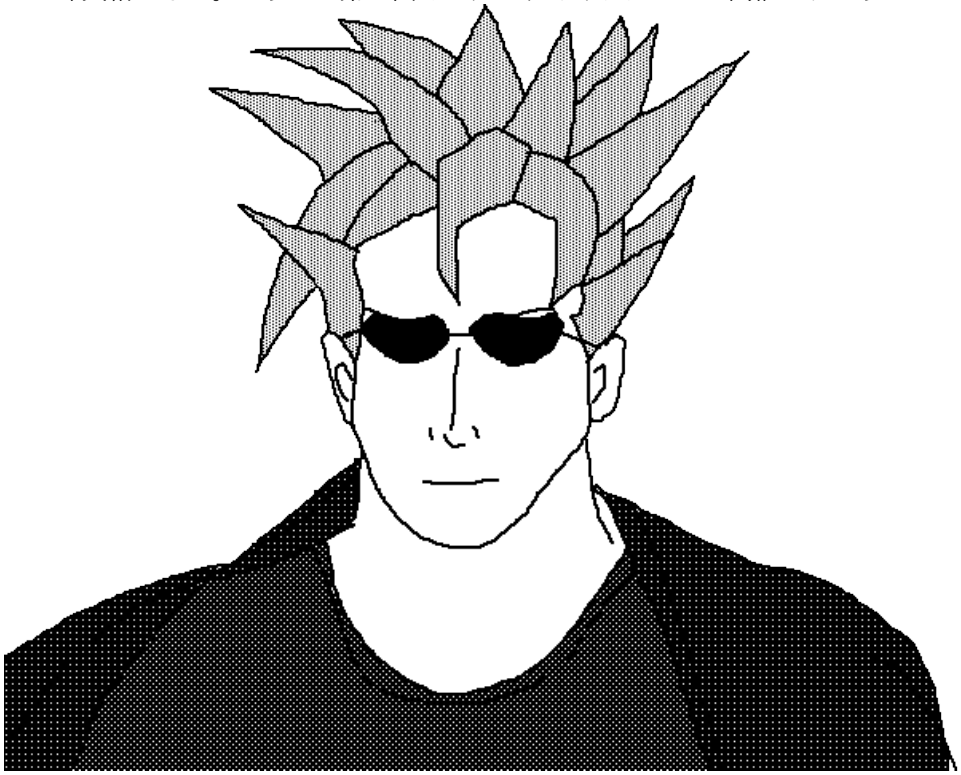
こうして銀河の大王の襲来は一日限りで終わった。地球連合政府は表向きは核兵器の宇宙空間への投棄を止め、地中深くに埋める政策に転換したのだった。

銀河の大王

2　最強の強化人間

銀河の大王の襲来と、それを一人で止め、姿を消したハロルドのネットヴィジョンを見ていた科学者ドクター・ラムダはあるアイディアを思いついた。銀河の大王のあの強力な龍のような気を生み出す遺伝子と、それを止めたハロルドの遺伝子を融合して、一人の強化人間を生み出せば、銀河帝国に立ち向かえる究極の人間兵器が作れるのではないか？ それはギャラクシーとゲーセ・ハロルドの頭文字を取って、G’（ ジー・ダッシュ ）と呼ばれた。

さらにドクター・ラムダはG’のサポート役として、洗脳マスクを被せた地球人をミニマムと名付け、月でG’のロールアウトが完了すると、実戦投入を行うことにした。ドクター・ラムダは当時独立を遂げたばかりで勢いのあった火星皇帝と組み、月でキングオヴギャラクシーという格闘大会を行うことを提案した。ルールはタッグマッチで、武器とヒットマンの使用を認めるものだった。どちらかのチームでリーダーが敗れた時点で、そのチームは即失格となる。こうして第一回キングオヴギャラクシーは開催されようとしていた。



強化人間 G’(ジー・ダッシュ)

３　グレート・アジア

「だから、キングオヴギャラクシーよ。」

「そんな大会、レスラー仲間と出てよ。」

「アタシ、強過ぎてレスラーの友達一人もいないから、パートナーは娘の亜希子に頼もうかしら？」

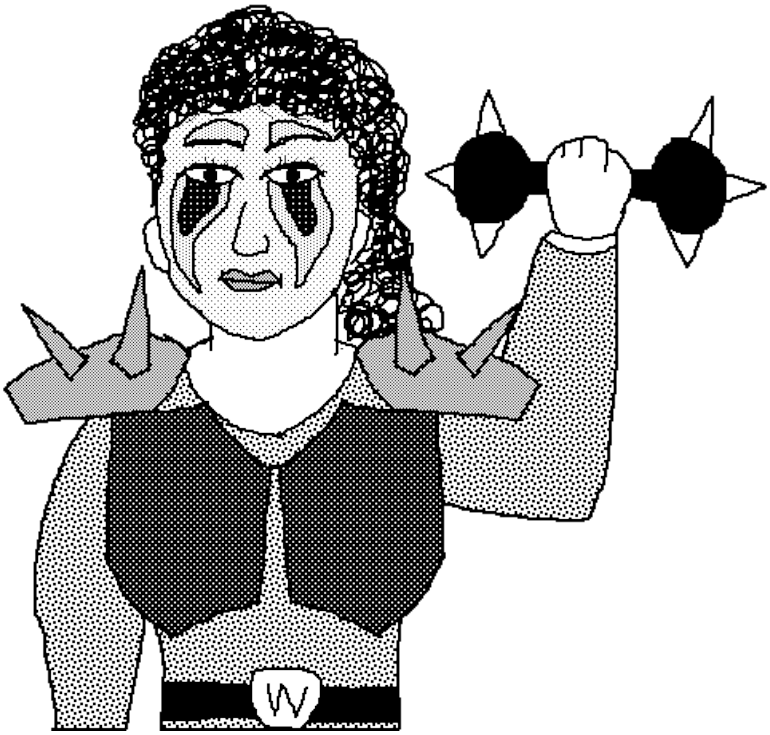
「わかったよ。いや、アッコはダメだ。俺が出ればいいんだろ？」

「最初から結論は出ているじゃないの。じゃあね、切るわ。」

グレート・アジアは夫のタビト大伴をキングオヴギャラクシーのパートナーにして参加を決めていた。確かにプロレス７大タイトルは全て統一していたが、総合ましてタッグ格闘技であるキングオヴギャラクシーでは、アジアの実力は未知数だった。

絶対やれる。武器とヒットマンの使用を認めるルールであれば、夫を凶器代わりに振り回して、飛び道具として使い、最後は自分がアマゾネスドライバーなどの必殺技で締めれば勝てるはずだった。ただ対戦相手の情報が不足していた。G’（ ジー・ダッシュ ）、ミニマム、銀河の大王、全て聞いたことがない名前の選手だった。さらに地球圏からは、メキシコ流空手のジュン・ハーン、火星帝国からも主催者特別エントリーチームが参加するとのことだった。

唯一地球人で予選なしに招待状が届いたのがグレート・アジアで、プロレスラーとしての実力を認められたからだった。



グレート・アジア

４　キングオヴギャラクシー

グレート・アジアは夫のタビト大伴、コードネーム「オヤジ４０（ フォーティー ）」を率いて、キングオヴギャラクシーに５回参戦した。五回とも、準決勝で、G’（ ジー・ダッシュ ）とミニマムのチームに当たって敗戦していた。初代アジアは気を使った技が一切使えなかった。そのため持ち前のパワーを活かして、夫のオヤジ４０を飛び道具として使っていた。これが、敗因の一つだった。もともと気の使い手であるオヤジ４０をチームリーダーに指名すれば、勝利の可能性はあった。しかし、アジアのプロレス王者としてのプライドがそれを許さなかった。相手の G’（ ジー・ダッシュ ）は大柄な強化人間ミニマムを楯として使い、必要に応じて、ミニマムに相手の動きを封じさせ、仲間ごとギャラクシーウェーブで吹き飛ばすという非道な戦法で勝利していた。さらに、G’（ ジー・ダッシュ ）は戦闘経験を積むにつれ学習・進化し、１１倍ギャラクシーウェーブや強力な乱舞技のダークラッシュを覚えていった。誰にも G’（ ジー・ダッシュ ）は止められない。そんな印象があった。もちろん絶大な科学力を誇る火星皇帝の配下のキラーマシンや、オリジナルの龍の気をもつ銀河の大王であっても，だ。

オヤジ４０

5　超一流の暗殺者

俺はプライドを取り戻すため、妻のアジアとのタッグを解消すると宣言すると、第六回キングオヴギャラクシーにエントリーした。パートナーは超一流の暗殺者のキラー・Lに頼んだ。彼は超一流の大泥棒を曾祖父にもつ、銀髪・碧眼の男だ。ギャラクシー決勝トーナメントまで、キラー・L のアシストを得て順調に進んだ。そこで待ち受けていたのが、G’（ ジー・ダッシュ ）とミニマムのチームだった。

俺はまず具現化した気を使った攻撃で G’（ ジー・ダッシュ ）を追い込むと、相手のギャラクシーウェーブを誘った。ミニマムが乱入して、俺を羽交い締めにした瞬間、俺は左肘に気を込めて発頸でミニマムを吹き飛ばした。G’ の放ったギャラクシーウェーブが同士討ちになった。

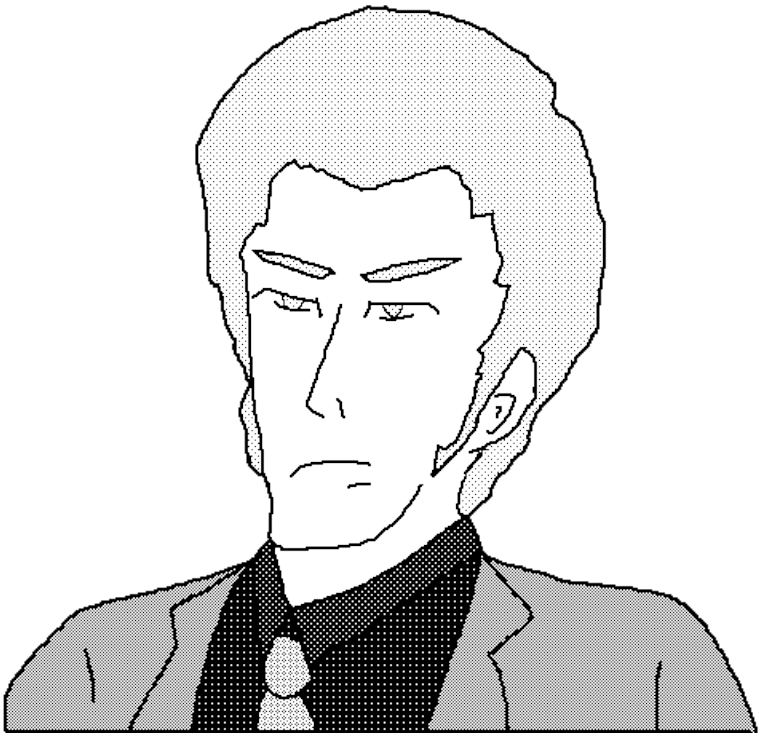
キラー・L がワルサー Q バズーカ仕様で G’（ ジー・ダッシュ ）を撃つと、俺は渾身の右ストレートで G’（ ジー・ダッシュ ）に殴り掛かる。そのまま首相撲に持ち込み、膝蹴りを連発した。

キラー・L とミニマムが揉み合って、場外で乱闘をしている隙に、俺は G’（ ジー・ダッシュ ）を腰車で投げると、全身の気を解放して G’（ ジー・ダッシュ ）を吹き飛ばした。新必殺技ハルマゲドン・レイヴが決まった瞬間だった。

「優勝賞金は契約通り 1:2 でいいよね。」

「もちろん、俺はプライドを取り戻すためにエントリーしている。」

妻のアジアも娘の亜希子も今の試合を見て納得し、勝手に仕事を辞めて小説家を目指したことを許してくれた。プロレスを続けることを条件に、俺たち家族はまた一緒に暮らすことになった。



キラー・L

６　ジャック・ハロルド

俺たち夫婦の弟子になりたいと志願してきた若者がいた。その名前はジャック・ハロルド。

俺に気の技術を教え、銀河の大王のギャラクシーウェーブから地球を救ったゲーセ・ハルロドの息子だった。ジャックは気を制御する技術に優れ、気弾を連発することが出来た。この才能は、前回のギャラクシーの後、俺から気の技術を学び始めた娘の亜希子にはないものだった。亜希子は母のグレート・アジア同様プロレスラー志望で、技が大味でパワフルだったが、コントロールがまだ出来ていなかった。

「次のギャラクシーは、ジャックと亜希子のチームでエントリーしてもらおう。」

妻のアジアは若干不満そうだったが、ジャックに必殺のプロレス技を伝授していった。

ジャックは順調に第７回キングオヴギャラクシーを勝ち残り、決勝で、ジュン・ハーンと G’（ ジー・ダッシュ ）のチームと当たった。今回のチームリーダーはジュン・ハーンとジャックだった。ジャックはジュンのメキシコ流空手の技を全てすれすれで躱すと、両手の拳で気弾を作り、二連発の痛風拳をジュンに飛ばした。ジュンが飛び蹴りでよけた瞬間、その飛び蹴りをキャッチして豪快に投げ飛ばし、そのまま全身の気を解放してダウンしたジュンにぶつけた。羅刹門が決まった。

「やった、私が手を出す間もなく、キングオヴギャラクシー優勝よ。」

しかし、ジャックが気をギャラクシーで使い切ったことを悟った乱入者があらわれた。

「本大会、主催者の暗闇と申します。ジャック・ハロルド、貴方の実力を試させていただきます。」

暗闇という女は黒髪、黒い瞳の美女だった。暗闇が構えた瞬間、ジャックとの間にブラックホールが現れ、ジャックは残っていた気を全て吸収され、力尽きた。

「誰か、私に挑戦する勇気のある方はいらっしゃいますか？」

暗闇に突然ハート型の黒いサングラスが投げつけられた。」

「待たせたな。そろそろ本番はじめようか？」

G’（ ジー・ダッシュ ）が全身の龍の気を解放して勝負に挑んでいた。

暗闇は吸収したジャックの気をもとに、気をムチのように使って攻撃した。だが、このような具現化攻撃が通じる相手ではなかった。

G’（ ジー・ダッシュ ）の左ミドルキック、右アッパー、左ボディ、右ハイキックが決まる。そのままつかんで一本背負いで投げると、全身の気を解放して一気にダウンした暗闇にぶち当てた。１１倍ギャラクシーウェーブが決まった瞬間だった。

ジャック・ハロルド

７ジャックの結婚

こうして第７回キングオヴギャラクシーはジャック達のチームの優勝で終わった。この試合を会場で見ていたジャックの幼なじみのイザベラは、ジャックに告白した。

「ジャック、今の試合見ていたわ。たしかあなたが私に最初にプロポーズしてくれたのは４歳の時よね。あの時の約束覚えているわね。」

（ えっ、そんな約束あったっけ？ 断れない雰囲気だな ）

「あぁ、覚えているよ。どんな約束だっけ。」

「二十歳になったら、結婚しよう。忘れるわけないよね。」

最初はジャックも、どこかで逃げ切れると思っていた。それから数ヶ月後、二人は満月の晩にビーチで会っていた。

「実は私、出来ちゃったみたいなの」

「出来ちゃった？ って何が。あぁ、でも、あの時は君がピル飲んでるって言ってたから」

「あれはただの風邪薬よ。鈍いわね、相変わらず。」

「わかった。責任を取ろう。君は今日からイザベラ・ハロルドだ。」

イザベラ

８　アジアの死

サイバー探偵業を副業にして、小説家をやっている俺の前に現れた一番大きなヤマはフジワラ４兄弟の野望を打ち砕くことだった。地球乗っ取りを企むフササキ・フジワラらは全員失脚していた。俺はあれからほぼ５、６年以上が経ち、奴らがムショから出てきていることを忘れていた。

ある日突然、ミセス・アバチャという女からメールが来た。

「旧西アフリカ地方の王族の遺産をスイス銀行まで輸送してほしい。報酬は３億グローバルリラだ。」

俺はこの依頼を受けると、旧西アフリカのアバチャ邸に潜入し、遺産の手がかりを探していた。しかし、アバチャ邸はもぬけの殻で、遺産どころか、何の家財道具もなかった。ただ、部屋の中央にあるネットヴィジョンだけが異様に黒光りしていた。

とつぜんスイッチがはいった。

フササキ・フジワラの顔が映し出される。

「ひさしぶりだね。名探偵君。我々は君のお陰で、ムショに５年もぶち込まれたよ。そのお礼と言っては何だが、君にプレゼントがある。」

ネットヴィジョンには突然、日本刀のようなものを突きつけられている娘の姿があった。

「アッコ！ はやく、そんな敵、気を使って吹き飛ばせ！」

「この敵には気が一切通じないの！ パワーも数段上！ その上、日本刀よ。」

「私、異界の死神と呼ばれております。前日島でお待ちしております。」

俺はネットヴィジョンを揺さぶって、アッコに声を掛けようとしたが、もう回線が切れていた。手元のアイウォッチで連絡を取り、前日島に殴り込みにいく仲間を探した。ジャックは練習中に骨折しており、ダメだった。唯一、オッケーだったのは妻ことグレート・アジアだった。

「許せない相手ね。今から殴り込みにいくわよ。」

前日島について半日、俺たちはやっと敵の隠れ家に着いた。中では異界の死神が日本刀を使って、娘の亜希子を人質に取っていた。

「きたねーな。素手で勝負しろよ。」

「それ以上動くと、この娘を斬る。」

数秒、沈黙が続いた。アジアは突然、日本刀をもっている異界の死神に近づくと、娘の亜希子を奪い返した。異界の死神が刀を振り下ろした瞬間、アジアは体を楯にして娘をかばった。

「アジアっー。くたばれ、オヤジングストーム！」

俺は全身のありったけの気を爆発させて、異界の死神にぶつけた。

「まさか、人間にここまでの気が...無念！」

「アジア。無事だったか。」

「亜希子は大丈夫。あなた、もうダメっ。」

「ア・ジ・アっー」

こうして俺たち夫婦は娘を取り戻したが、アジアはこの時の刀傷が原因で亡くなった。後からはアジアの遺書が見つかった。

大伴亜希子（ 二代目グレート・アジア ）

９　未来からの使者

妻のアジアの一周忌が終わると、娘の亜希子は二代目グレート・アジアを襲名した。もうそろそろタイトが取れるかな、そんな時期だった。突然、事務所兼ジムに若いジパング人の男女が訪ねてきた。見覚えのない相手だったが、俺は相手から善良そうな気配を感じ取っていた。

「サイバー探偵をやっているポルゴです。こちらはパートナーのミス・ワカマツです。」

そう言って二人は自己紹介してくれた。二人はどうやら３世紀後の未来からやってきたらしい。タイムマシンの燃料がなくなったため、それを購入する資金を溜めるために、最強のプロレスラー、つまりグレート・アジアと組んで、ギャラクシーに挑戦して賞金を手に入れると説明を受けた。ポルゴと２代目アジアはヘルリベンジャーズというチーム名でエントリーした。第９回キングオヴギャラクシーが始まろうとしていた。

１０　ヘルリベンジャーズ

第９回キングオヴギャラクシーは二代目アジア＆ポルゴのヘルリベンジャーズとキラー・L ＆ジュン・ハーンのナイスガイチームが決勝まで残った。決勝の決まり手はスーパーフランケンシュタイナーだ。その後、リングにスプラッター星人と名乗る小太りの中年宇宙人が乱入した。奴はアジアを対戦相手に指名して、その打撃をタフな体で全て受け止めた。アジアが最後のトドメをさそうとした瞬間、スプラッター星人はアジアの今までの攻撃を全て吸収して、自爆しようとした。

爆発の瞬間、G’（ ジー・ダッシュ ）が瞬間移動を使って、スプラッター星人を宇宙空間に移動させたが、その後 G’（ ジー・ダッシュ ）は消息不明になってしまった。

ギャラクシーの優勝賞金をもとに、ポルゴ達は燃料を買い、もとの時代へ戻っていった。

ジュン・ハーン

１１　結末

結局、俺は小説家になり、娘の亜希子は二代目のグレート・アジアになった。ポルゴ達の話によれば、どうやら数世紀後の未来までグレート・アジアの名前と血は継承されるようだった。歴史は繰り返す。戦争もなくならない。それが未来から来たというアルセーヌ・ポルゴが教えてくれた将来像だった。しかし、今を生きる俺は、未来を自分の手で変えることが出来る。行ってしまった人たちはもう戻らないが、俺は今こうして生きている。それだけで、十分じゃないか。

－キングオヴギャラクシー小説版 完－

あとがき

この作品は『ザキングオヴギャラクシー'99』99 年と『ミレニアムキングオヴギャラクシー』2000 年および『フジワラ 4 兄弟の野望 X』2001 年のマック向けゲームのシナリオをノベライズしたものです。

ゲームのシナリオをノベライズしたため、一般の小説としては読み辛いかと思います。もとのゲームはシリーズで一万人規模のユーザーを迎えたヒット作でした。

『キングオヴギャラクシー』の世界観を継承した作品に『アルセーヌ・ポルゴ』がありますので、ぜひご覧になってください。また『キングオヴギャラクシー』の最新作はゲーム「THE KING OF GALAXY XX」として現在公開中です。よろしかったら、ぜひお試しください。

2018 年 5 月 5 日 夏木康志

奥付

奥付

キングオヴギャラクシー

https://puboo.jp/book/40514

著者：夏木康志
著者プロフィール：https://puboo.jp/users/ynatsuki/profile

感想はこちらのコメントへ
https://puboo.jp/book/40514

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/40514

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（ https://puboo.jp/ ）
運営会社：株式会社 paperboy&co.

キングオヴギャラクシー

著　　夏木康志

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社